

**研究拠点形成事業
平成29年度 実施計画書**

B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	京都大学総合博物館
(韓国) 拠点機関：	ソウル大学校
(中国) 拠点機関：	山東大学
(ベトナム) 拠点機関：	ベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館
(ラオス) 拠点機関：	ラオス国立大学
(ミャンマー) 拠点機関：	ヤンゴン大学
(タイ) 拠点機関：	チュラロンコン大学
(マレーシア) 拠点機関：	マラヤ大学
(インドネシア) 拠点機関：	インドネシア科学院生物研究センター

2. 研究交流課題名

(和文)：持続的アジア脊椎動物種多様性研究ネットワークと若手研究者育成
(交流分野：生物学)

(英文)：Sustainable Asian vertebrate species diversity research network and young researcher development
(交流分野：Biology)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/acore2017/>
(5月1日頃開設予定)

3. 採用期間

平成29年4月1日 ～平成32年3月31日
(1 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：京都大学総合博物館

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：総合博物館・館長・岩崎奈緒子

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：総合博物館・教授・本川雅治

協力機関：なし

事務組織：京都大学本部構内(文系) 共通事務部経理課外部資金掛

相手国側実施組織(拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

- (1) 国名：韓国
拠点機関：(英文) Seoul National University
(和文) ソウル大学校
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :
(英文) College of Veterinary Medicine・Professor・LEE Hang
- (2) 国名：中国
拠点機関：(英文) Shandong University
(和文) 山東大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :
(英文) Marine College・Professor・LI Yuchun
協力機関：(英文) Guangzhou University
(和文) 広州大学
協力機関：(英文) Chengdu Institute of Biology, Chinese Academy of Sciences
(和文) 中国科学院成都生物研究所
- (3) 国名：ベトナム
拠点機関：(英文) Vietnam National Museum of Nature
(和文) ベトナム科学技術院ベトナム国立自然博物館
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :
(英文) Department of Biology・Researcher・NGUYEN Thien Tao
協力機関：(英文) VNU Hanoi University of Science
(和文) ハノイ国家大学自然科学大学
協力機関：(英文) Institute of Ecology and Biological Resources,
Vietnam Academy of Science and Technology
(和文) ベトナム科学技術院生態学生物資源研究所
- (4) 国名：ラオス
拠点機関：(英文) National University of Laos
(和文) ラオス国立大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :
(英文) Faculty of Environmental Sciences・Lecturer・SANAMXAY Daosavanh
- (5) 国名：ミャンマー
拠点機関：(英文) University of Yangon
(和文) ヤンゴン大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :
(英文) Department of Zoology・Professor・THIDA LAY THWE
- (6) 国名：タイ
拠点機関：(英文) Chulalongkorn University
(和文) チュラロンコン大学
コーディネーター (所属部局・職・氏名) :

(英文) Faculty of Science・Professor・MALAIVIJITNOND Suchinda

(7) 国名：マレーシア

拠点機関：(英文) University of Malaya

(和文) マラヤ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) Institute of Biological Sciences・Professor・ROSLI HASHIM

協力機関：(英文) University of Malaysia Sarawak

(和文) マレーシアサラワク大学

(8) 国名：インドネシア

拠点機関：(英文) Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences

(和文) インドネシア科学院生物研究センター

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) Research Center for Biology・Researcher・AMIR HAMIDY

5. 全期間を通じた研究交流目標

本事業はアジア脊椎動物種多様性の持続的研究ネットワークを構築し、若手研究者育成を行うものである。アジア広域での多国間の協力体制やネットワーク構築のために、日本側は京都大学総合博物館が拠点機関となり、韓国、中国、ベトナム、ラオス、ミャンマー、タイ、マレーシア、インドネシアのアジア8カ国の相手国拠点機関と本事業を推進する。日本側、相手国ともに脊椎動物種多様性研究における優れた研究者と、研究の基盤となる学術標本をリソースとした機関であり、同時に本事業に参画し、研究能力の向上と次世代リーダーへの成長を目指す大学院生や若手研究者を有している。脊椎動物種多様性はアジアにおいてきわめて高い一方で、その種分類、分布、系統関係、生態、生活史などの基礎的知見の研究は依然として不十分である。特に国境を越えた広域理解が求められている。また、種多様性は環境変動などに伴い変化するので、継続的な種多様性研究が必要であるが、そのためには世代を超えて持続的に研究者を育成しておくことが必要である。研究の基盤になる学術標本の収蔵体制の構築や共有利用も図りながら、脊椎動物種多様性研究の持続的な多国間ネットワークを各国のトップ大学が中心に構築・維持し、同時に大学院生や若手研究者の育成や研究力向上をはかっていくこと、そのためのプログラム実施を本事業の交流期間における目標とする。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成29年度から開始

7. 平成29年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

本事業では、京都大学総合博物館および京都大学が核となり、国内研究者と協力して、韓国、中国、ベトナム、ラオス、ミャンマー、タイ、マレーシア、インドネシアという東

アジア・東南アジア全域をカバーする多国間ネットワークの形成による、アジア脊椎動物種多様性研究の国境と世代を超えた研究協力体制の構築を目指す。初年度はフィールドワークと標本研究に基づく各国との共同研究の実施を進め、アジア脊椎動物種多様性の地域ごとの情報の充実と洗練を目指す。情報蓄積の遅れている中国、ベトナム、ラオス、ミャンマー、マレーシアとの共同研究に重点を置き、韓国、タイ、インドネシアでも関連して標本調査などを行う。特にベトナム、ラオス、ミャンマーではコア研究者および大学院生や若手研究者をあわせたメンバーからなる日本と各国共同による2週間程度のフィールドワークを実施する。

また、初年度は参加各国のコーディネーターやコアとなる研究者、さらに大学院生や若手研究者が、直接に交流し議論するための第7回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムをミャンマーのヤンゴン大学で12月に2日間開催し、それにあわせてフィールド調査のワークショップをヤンゴン近郊で2日間開催する。その際に、各国の脊椎動物種多様性の最新情報を共有しながら、同時に国境を越えた生物多様性理解への情報共有や多国間共同研究の推進をはかる。このシンポジウムは日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業、研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型の先行事業により、これまでに2011年より毎年アジア各地で開催してきたシンポジウムを継承したものである。本事業に含まれない台湾も含めて10カ国150名程度の参加が見込まれ、アジア各国の脊椎動物種多様性研究の重要な研究交流と共同研究推進の機会となることが期待される。また、研究基盤ともいえる標本の情報共有や国境を越えた活用、世代を超えた持続的なネットワークについても議論を進める。

本事業経費ではないが、ベトナム側のコアメンバー1名を拠点機関である京都大学総合博物館に3ヶ月間、客員准教授として招へいし共同研究及び多国間ネットワーク形成を進める。

<学術的観点>

研究協力体制の構築でも記した第7回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムをヤンゴン大学で12月に開催する。シンポジウムでは40件以上のオリジナルな内容を含む研究発表が予定されており、それに基づく議論も含めて、アジア脊椎動物種多様性研究において高い学術的成果が期待される。本事業による各国および多国間枠組みでの共同研究からは多くの学術研究論文の出版が見込まれる。また、日本側コーディネーター、日本側メンバー、ベトナム側メンバーの3名を編者として「Mammals of Vietnam」をSpringerから2019年に出版する計画がはじまり、ベトナムだけでなく、関わりの深い中国、ラオス、タイ、ミャンマーなどの生物多様性情報も含めたとりまとめが進むことによる、学術的進展が期待される。

国際シンポジウムの実施に加えて、日本側メンバーの相手国での共同研究実施、相手国研究者の日本への招へいに合わせて、学術的成果の共有を目的としたメンバーを主な対象としたセミナーやワークショップを開催する。先行事業も踏まえると今年度に10件程度の開催が見込まれる。年度当初に詳細を確定させることが困難であり、個別にセミナー計画としてはあげていないが共同研究の一環として実施予定である。

<若手研究者育成>

若手研究者育成として、5カ国5名の大学院生または若手研究者を2週間日本に招へいし、日本側メンバーと実践的な共同研究の実施、フィールドワーク、標本調査、文献調査、形態学・遺伝学解析、統計解析、研究計画紹介、研究成果発表、研究者交流、日本の学会大

会への参加などの実践をもとにした共同研究を軸にした活動を進める。研究テーマと主たる日本側受入メンバーを考慮しながら、数名を同時に招へいし、二国間ではなく、多国間での相乗効果を生む配慮をする。招へい期間中にセミナーを開催し、日本の大学院生・若手研究者も含めて研究成果や今後の研究計画の発表と議論を行い、同時にコア研究者からのアドバイスの機会とする。基本的にこうしたセミナーの企画・実施も日本を含めた多国間の若手研究者によって進めていく。

また、すでにのべた第 7 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムでは、本事業により参加を支援する日本と各国の大学院生や若手研究者に優先的に口頭発表の機会を与える。また、その後に行うフィールド調査のワークショップの計画・実施は、各国から選抜された大学院生および若手研究者からなるチームによって運営する予定である。こうした実践的な活動展開によって、若手研究者のそれぞれの発展が期待されるとともに、若手研究者のコミュニティーや若手研究者同士の相乗効果が生み出す持続的効果も期待される。単に若手研究者の研究力向上を目指すだけでなく、次世代リーダーとなるためにあらゆる実践的活動を活用した若手研究者の育成を進める。

なお、日本への招へいおよび国際シンポジウムの参加については、日本及び相手国の若手研究者に対して実施後の英文レポート提出を義務化する。活動時に得た成果をきちんと文章化し、コーディネーターやコアメンバーと共有することが若手研究育成にさらなる効果を生み出すとともに、コア研究者にとって本事業運営の今後の改善などにつなげる効果も期待される。

なお、本事業では修士課程・博士課程の大学院生に特に焦点をおきながら、ポスドクや若手研究者など、学部卒業後おおむね 10 年以内程度の研究者の育成に重点をおく。各国での新たな優秀な学生を見つけることも重要である。日本側メンバーが相手国を訪問した際に実施するセミナーに学部生の参加も積極的に認めたり、別途学部生を対象とした日本側コア研究者による講演も行う。また、日本側コーディネーターが 2016 年に TEDxKyotoUniversity で英語講演した内容が YouTube で配信されているので、各国の若手研究者への周知を進め、実践的議論の素材とする。

本事業経費ではないが、ラオス側コーディネーターが本年度より 3 年間の日本学術振興会論文博士取得事業を受け、日本側コーディネーターを研究指導者として 2019 年度末に京都大学での学位取得を目指している。本年度は 90 日間京都大学総合博物館で研究指導を受けるとともに、日本側コーディネーターがラオスに 2 週間の予定で研究指導に行く予定である。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

拠点機関である京都大学総合博物館では、京都大学国際シンポジウム「脊椎動物種多様性のアジア多国間研究ネットワーク」を 12 月にミャンマーのヤンゴン大学で開催し、脊椎動物種多様性研究だけでなく大学博物館の学術標本の意義について議論する予定である。第 7 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムの直前に開催することにより、相乗効果が生まれることが期待される。

8. 平成29年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成31年度
研究課題名	(和文) 国境を越えた脊椎動物種多様性理解のための標本収集と種分類体系改訂 (英文) Specimen collection and revision of species taxonomy for understanding of vertebrate species diversity beyond country borders				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 京都大学人間・環境学研究科・准教授・西川完途 (英文) NISHIKAWA Kanto Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) 韓国 LEE Hang Seoul National University, College of Veterinary Medicine・Professor 中国 LI Yuchun Shandong University, Marine College・Professor ベトナム NGUYEN Thien Tao Vietnam National Museum of Nature, Department of Biology・Researcher ラオス SANAMXAY Daosavanh National University of Laos, Faculty of Environmental Sciences・Lecturer ミャンマー THIDA LAY THWE University of Yangon, Department of Zoology・Professor タイ MALAIVIJITNOND Suchinda Chulalongkorn University, Faculty of Science・Professor マレーシア ROSLI HASHIM University of Malaya, Institute of Biological Sciences・Professor インドネシア AMIR HAMIDY Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences・Researcher				

<p>29年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>アジアにおいて脊椎動物種多様性理解が十分に進んでいない地域であるベトナム、ラオス、ミャンマーの山間部において日本および相手国のコア研究者および若手研究者で構成したチームにより2週間程度のフィールドワークを展開し、標本収集を行う。標本の形態学的・遺伝学的解析を進めることにより既存の種分類体系の問題解決、あるいは新たな問題の整理を進める。比較が必要な他の国の標本についてもすでに蓄積してきたデータ、あるいは新たな調査や解析によって比較を行う。こうした分類学的再検討において、本事業で形成を進める多国間ネットワークを有効に活用することができる。種分類体系の見直しの進んだ分類群から二国間あるいは多国間共同研究による研究成果として学術論文としてとりまとめ、学術雑誌に投稿する。本共同研究は各国メンバー全員が参加する。</p> <p>アジア脊椎動物種多様性に関するいくつかのテーマは大学院生や若手研究者が積極的に取り組む。5カ国5名の大学院生または若手研究者を選抜し、2週間日本に招へいし、研究テーマをもとに実践的な共同研究を実施する。その際に、フィールドワーク、標本調査、文献調査、形態学・遺伝学解析、統計解析、研究計画紹介、研究成果発表、日本の学会大会への参加などに取り組む。複数の招へい期間が重なるように配慮し、日本の大学院生や若手研究者も含めた相互作用により、共同研究の飛躍的進展を目指すとともに、日本において多国間枠組みでの研究交流を進める。</p>
<p>29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>アジアにおいて、本事業が特に重点をおいて研究を進めている陸上小型動物（哺乳類、爬虫類、両生類）では多くの新種や国レベルでの新記録が報告されている。なかでも本共同研究が特に着目するベトナム、ラオス、ミャンマーの山間部では種多様性に関する知見がきわめて限られており、本事業メンバーによるこれまでの調査でも新種や新記録種が見つかっている。一方で、そうした成果を学術的に成果ある内容として発表するためには周辺国との比較が不可欠である。本年度の共同研究活動から、いくつかの小型脊椎動物種の分類体系の整理が進み、新種記載も視野に入れた学術論文の公表が期待される。また、学術的発見が日本の研究者のみで行われることも多かったが、本事業では相手国の脊椎動物の種多様性に関わる若手研究者を日本に招へいし、最良の研究基盤の中で実践的に共同研究成果を生み出し、とりまとめる過程を多国間の枠組みで分担、共有することを目指している。これは相手国の研究能力の向上に寄与し、招へいした研究者の帰国後もさらなる波及効果をもって新たな研究成果につなげていくことが期待される。</p>

整理番号	R-2	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成31年度
研究課題名	<p>(和文) 持続的アジア脊椎動物種多様性研究ネットワークにおける実践的活動の評価</p> <p>(英文) Evaluation of practical activities for sustainable network for Asian vertebrate species diversity research</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 京都大学総合博物館・教授・本川雅治</p> <p>(英文) MOTOKAWA Masaharu The Kyoto University Museum, Kyoto University・Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	<p>(英文)</p> <p>韓国 LEE Hang Seoul National University, College of Veterinary Medicine・Professor</p> <p>中国 LI Yuchun Shandong University, Marine College・Professor</p> <p>ベトナム NGUYEN Thien Tao Vietnam National Museum of Nature, Department of Biology・Researcher</p> <p>ラオス SANAMXAY Daosavanh National University of Laos, Faculty of Environmental Sciences・Lecturer</p> <p>ミャンマー THIDA LAY THWE University of Yangon, Department of Zoology・Professor</p> <p>タイ MALAIVIJITNOND Suchinda Chulalongkorn University, Faculty of Science・Professor</p> <p>マレーシア ROSLI HASHIM University of Malaya, Institute of Biological Sciences・Professor</p> <p>インドネシア AMIR HAMIDY Research Center for Biology, Indonesian Institute of Sciences・Researcher</p>				
29年度の 研究交流活動 計画	<p>アジアの脊椎動物種多様性理解において多国間の枠組みでのネットワークがきわめて重要である。拠点機関のこれまでの活動で、一定の多国間ネットワークが形成されたが、それを次世代に向けて継続していくことが大きな課題となっている。本共同研究は各国のコアメンバーが参加し、持続的ネットワークにおけるコア研究者および若手研究者が行う実践的活動を評価し、その改善を図る。電子メールなどで事前に議論を進めたうえで、S-1、S-2のセミナーを実施する際に、各国メンバーと本事業の活動を例に、評価手法に関する共同研究を展開したうえで、その後にとりまとめをはかる。本共同研究は世代を超えた科学コミュニティの本質にもかかわることであるので、既存の陳腐化したアンケート調査などに頼ることなく、コアメンバー、若手研究者の生の声をもとに、効果的な評価を確立し、それをもとに有効な改善につなげることを目指す。この共同研究自身も実践的活動といえる。特に若手研究者に自由形式で提出してもらったレポート、第7回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウムにおける議論も踏まえながら、10年を一つ</p>				

	<p>の世代とした際に世代間ネットワークを持続させる手法を，科学政策への提言も視野に入れながら検討する．</p>
<p>29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>日本では各研究分野において，若手研究者の育成が重要課題とされているが，そもそも若手研究者の範囲が不明である上，実践的な若手研究者育成が進んでいる事例はきわめて限られている．本共同研究では，教育や科学研究の背景の異なるアジア各国の研究者と直接に議論することにより，各国の研究基盤の現状が多様な中で，どのようにしてアジアの脊椎動物種多様性研究に活躍できる各国の若手研究者を育成し，世代を超えたネットワークを可能にできるかを探求する．これまでの日本の学術提言の中には現場から乖離したものが少なくない．机上での議論や，経済環境や社会基盤が大きく発展的に変革している現状から離れた従前のアジア観にとらわれた議論が多い．本共同研究では，アジア視点・アジア現場主義で活躍するアジアの研究者自身が，研究者の持続性の方策について世界に向けて発信することが期待される．十分な議論が必要なため，初年度は主要メンバーでドラフトを作成し，次年度以降の公表に向けた洗練化や具体的な活動プランの議論につながることを期待される．</p>

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第7回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “ 7th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity “
開催期間	平成29年12月6日 ~ 平成29年12月7日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ミャンマー ヤンゴン ヤンゴン大学 (英文) Myanmar, Yangon, University of Yangon
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 本川雅治・京都大学総合博物館・教授 (英文) MOTOKAWA Masaharu, The Kyoto University Museum, Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) THIDA LAY THWE, University of Yangon, Department of Zoology・Professor

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (ミャンマー)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	10/30	
韓国 〈人/人日〉	3/9	
中国 〈人/人日〉	6/18	
ベトナム 〈人/人日〉	6/18	
ラオス 〈人/人日〉	3/9	
ミャンマー 〈人/人日〉	10/20	50
タイ 〈人/人日〉	5/15	
マレーシア 〈人/人日〉	5/15	
インドネシア 〈人/人日〉	5/15	
合計 〈人/人日〉	53/149	50

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

備考: 日数は渡航日からシンポジウム終了日、翌日から帰国日までをS-2に計上。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本事業の各国コア・若手メンバーが集い、初年度としての事業計画を共有するとともに、アジア脊椎動物種多様性の各国メンバーの最新のオリジナル知見の研究発表と議論を通じた学术交流、多国間の枠組みでの理解促進、新たな共同研究への発展を目指す。本シンポジウムはアジアから自己経費での参加も含めて 150 名程度が見込まれるアジアの研究者による国際シンポジウムとしては重要な学术交流の機会である。2011 年度から日本学術振興会の事業として、拠点機関の京都大学総合博物館が毎年アジア各地で開催しているシンポジウムを継承したもので、ミャンマーでは初開催である。また国際シンポジウムでは若手研究者の育成も含めた多国間ネットワークの持続性に着目し、メンバー間で重点的な議論の場を設ける。</p>
<p>期待される成果</p>	<p>本事業に拠点国として参加する 9 カ国のメンバーが集い、さらにコア研究者だけでなく、若手研究者を重点的に招へいし、口頭発表の機会を設けることで、実質的で学術的にきわめて有益な議論が展開され、多国間の学术交流が急速に進むことが期待される。また、そうした活動を踏まえて、コア研究者と若手研究者双方が、若手研究者の育成や多国間ネットワークの持続性を実現するための活動について議論と相互理解が進むことが期待される。これまでの同様のシンポジウムを参考にすると、20 代から 30 代はじめの若手研究者の参加者比率が高く、30 代から 40 代が主である各国コーディネーターやコア研究者も含めて参加者の平均年齢が若い国際シンポジウムになることが予想される。そして、現場で様々なことを参加者の決断と責任で全て決めるというシンポジウムのやり方も既に定着している。日本でこうしたスタイルの国際シンポジウムは例外的であるかもしれない。本シンポジウムが現在の日本のアジアネットワークや若手研究者育成が現場から乖離し、成果を伴っていない現状を大きく変革する実践例となることが期待される。</p> <p>加えて学術基盤が十分とはいえないミャンマーでの開催にも大きな意義がある。実際の運営体制をヤンゴン大学の研究者が担うことによる研究力向上、またメンバーでないものも含めて多くのミャンマーの大学院生や学部生が国際シンポジウムに参加し、アジア研究者とのふれあいによりもたらされる大きな学術的・教育的波及効果が期待される。</p>
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側、ミャンマー側実施責任者を Co-chair とする拠点国メンバーによる実行委員会、実施国であるミャンマーメンバーを主とした事務局を構成する。このほかに各国からの大学院生・若手研究者で若手研究者委員会（仮称）を構成し、シンポジウムでの企画提言を担う。</p>

開催経費 分担内容	日本側	内容 講演要旨集 印刷費 150,000 円 会場費 100,000 円 外国旅費 3,000,000 円 外国旅費にかかる消費税 200,000 円
	ミャンマー側	内容 経費負担なし

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「研究トレーニングワークショップ」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Research Training Workshop “
開催期間	平成29年12月8～9日(2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ミャンマー ヤンゴン市郊外野生動物公園
	(英文) Myanmar, Yangon, Wildlife Park
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 西川完途・京都大学人間・環境学研究所・准教授
	(英文) NISHIKAWA Kanto, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Associate Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) THIDA LAY THWE, University of Yangon, Department of Zoology・Professor

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (ミャンマー)	
	A.	B.
日本 <人/人日>	10/30	
韓国 <人/人日>	3/9	
中国 <人/人日>	6/18	
ベトナム <人/人日>	6/18	
ラオス <人/人日>	3/9	
ミャンマー <人/人日>	10/20	
	10	
タイ <人/人日>	5/15	
マレーシア <人/人日>	5/15	
インドネシア <人/人日>	5/15	
合計 <人/人日>	53/149	
	10	

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

備考: 日数は渡航日からシンポジウム終了日、翌日から帰国日までをS-2に計上。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい

場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>アジアの脊椎動物種多様性の多国間ネットワークの推進には、調査手法の国境と世代を超えた標準化や、国による調査手法の違いや多様性の理解と意見交換が必須である。また、フィールドワークで捕獲した標本から学術的知見を生み出していく過程を実践的に習得することも若手研究者にとって重要である。単にコア研究者が教示するだけでなく、若手研究者同士が協力して考え、行動し、改善につなげることが不可欠である。2日間の本ワークショップでは野生動物公園で、参加者がいくつかのチームに分かれて実践的に脊椎動物種多様性の調査を日中および夜間に行う。また捕獲した動物や標本から写真、音声、計測などのさまざまなデータ収集を協力して行い、種同定を目指す。2日目朝までの調査結果をチームごとにとりまとめ、2日目午後に成果発表と討論を行う。一連のワークショップを通じて、若手研究者のスキルアップと多国間での相互交流を目指す。なお、具体的な活動の進め方は各国の若手研究者の代表で構成される若手研究者委員会が事前にメールやネット会議などを通じて数ヶ月前から議論し、その中で企画構築を進める計画である。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>フィールドワークや野外調査手法を、文献などの文字情報で共有することは困難である。一方で、各国の研究者はさまざまなスキルやテクニックをもつとともに、一方で現状に満足できず改善が必要と感じている手法も少なくない。本ワークショップではフィールドの第一線で研究を行う、各国の若手・コアメンバーが集い、実践的な調査を行う過程でそうした調査手法の共有や改善、意見交換をはかる。さらに、多国間メンバーで構築される調査チームでの調査から成果発表までを通じて、若手研究者の現場での調査能力、コミュニケーション能力や限られた時間での成果とりまとめ、発表、討論などのスキルアップが進むことが期待される。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>S-1で組織する日本側、ミャンマー側実施責任者を Co-chair とする拠点国メンバーによる実行委員会、実施国であるミャンマーメンバーを主とした事務局、各国からの大学院生・若手研究者からなる若手研究者委員会（仮称）で運営する。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 経費負担なし（外国旅費は S-1 に計上）</p>
	<p>ミャンマー側</p>	<p>内容 経費負担なし</p>

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

平成 29 年度は実施しない

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当しない

9. 平成29年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	韓国 〈人/人日〉	中国 〈人/人日〉	ベトナム 〈人/人日〉	ラオス 〈人/人日〉	ミャンマー 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	マレーシア 〈人/人日〉	インドネシア 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		()	()	2/30 ()	1/15 (1/12)	10/70 (5/25)	(1/3)	()	()	13/115 (7/40)
韓国 〈人/人日〉	()		()	()	()	2/12 (1/6)	()	()	()	2/12 (1/6)
中国 〈人/人日〉	1/15 ()	()		()	()	3/18 (3/18)	()	()	()	4/33 (3/18)
ベトナム 〈人/人日〉	1/15 (1/92)	()	()		()	3/18 (3/18)	()	()	()	4/33 (4/110)
ラオス 〈人/人日〉	(1/90)	()	()	()		2/12 (1/6)	()	()	()	2/12 (2/96)
ミャンマー 〈人/人日〉	1/15 ()	()	()	()	()		()	()	()	1/15 (0/0)
タイ 〈人/人日〉	1/15 ()	()	()	()	()	3/18 (2/10)		()	()	4/33 (2/10)
マレーシア 〈人/人日〉	()	()	()	()	()	3/18 (2/10)	()		()	3/18 (2/10)
インドネシア 〈人/人日〉	1/15 ()	()	()	()	()	3/18 (2/10)	()	()		4/33 (2/10)
合計 〈人/人日〉	5/75 (2/182)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/30 (0/0)	1/15 (1/12)	29/184 (19/103)	0/0 (1/3)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	37/304 (23/300)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

3 / 9 <人/人日>

10. 平成29年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	200,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	5,300,000	
	謝金	100,000	
	備品・消耗品購入費	100,000	
	その他の経費	300,000	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	400,000	
	計	6,400,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		640,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合計		7,040,000	